

# 「古典古代学」の恩師たち

## —ニュッサのグレゴリオスを機縁として—

秋 山 学

### 序. 久保正彰教授のための記念謹呈論文集をめぐって

筆者は先に、2020年10月に卒寿を迎えられる日本学士院会員（西洋古典学）・久保正彰東京大学名誉教授（1930- ）のための記念論集に「ビザンティン三部作—古典学と神学のあわい—」と題する拙稿を寄稿した。そのための投稿締切は2019年9月末日に設定されていたが、実はその2年前、すなわち2017年の9月末に、いったん久保教授の米寿記念論集のための投稿締切が設定され、筆者はそれに応じて入稿したものの原稿の集まりが悪く、2年後を期して新たな企画の原稿募集が行われる、という経緯があった。筆者はこの再度の原稿募集に応じ、新たな原稿（「新稿」）を寄稿したわけであるが、2年前に準備した「旧稿」についても、改めて読み直してみると棄て難く思うようになった。そこで、この2年間でデータの差し替えが必要となった等の部分については適宜刷新しつつ、全体の趣旨は変えずに、このたび本学の紀要にこの「旧稿」を修正のうえ寄稿することにした（「本稿」）。特に若き方々のため、筆者の経験をこの機会に省みておくのも無意味ではないと思ったためである。

ところで、これら久保教授記念論集のために寄稿した2つの拙稿は、筆者の中ではその作成のスケジュール上、奇しくもギリシア教父・ニュッサのグレゴリオス（335－394）関連の研究発表の準備と重なり合うことになった。ニュッサのグレゴリオスは、ギリシア教父学の上で、オリゲネス（185－253）と並び一つの大きな中心スポットとなっており、最近では2014年にローマ（サンタ・クローチェ大学）で、また2018年にはパリ（サン・ベルナルダン学院）で、いずれも「国際ニュッサのグレゴリオス学会」の大会が開催された。筆者はこれら二つの大会で口頭発表を行ったが、まず「旧稿」を脱稿した2017年9月30日は、ちょうどパリ大会のための発表要旨提出の締切と重なっていた。一方、この「本稿」の執筆中に、ローマ大会での研究発表を基にした筆者の英語論文が、ジュリオ・マスペロ師（サンタ・クローチェ大学；

1970- )のご厚意により、『ストゥディア・パトリスティカ』誌（ペーターズ社）の増刊号に収録される、との報があった（2019年10月26日；公刊は2020年の予定）。ローマ大会・パリ大会とも、筆者は口頭発表をイタリア語で行ったのであるが、ローマ大会分については、イタリア語の研究論文の収録本数を3本に限定するとした出版社（ブリル社）の条件に合わず、原版のかたちでは非採録となり、英語版に改めることを条件に、マスペロ師が『ストゥディア・パトリスティカ』誌と交渉して下さり、幸いなことに拙稿が当誌に採録されることになった、という経緯がある。

さて「旧稿」は、元来の稿題を「ヴェルナー・イエーガーの学統の現在—「フィロロギア」を超えるもの—」とするものであった。久保教授は、ハーヴァード大学で古典学者ヴェルナー・イエーガー（1888-1961）の薫陶を受けておられる。その久保教授より古典学上の教育を受けた筆者は、少なくとも系譜の上では、イエーガーの「孫弟子」に当たる。そしてこのイエーガーが、その後半生において研究上の主たる対象としたのが、上述のニュッサのグレゴリオスであった。このグレゴリオスは、現在筆者が自らに課しているいくつかの研究分野のうち、「教父哲学」の一つの基軸を成す存在である。「旧稿」は、久保教授を「イエーガーの弟子」として位置づけつつ、イエーガーに関わることになった本学・筑波大学関係者たちの系譜をも辿りながら、筆者自身の歩みを顧みるものになった。これを修正した本稿では、基軸とする人物を、イエーガーよりもむしろ、そのイエーガーが精力を傾けたギリシア教父・ニュッサのグレゴリオスに遡らせることとなった。

では「旧稿」と現在のあいだを往還しつつ、本稿を記すことにしたい。

## 1. ニュッサのグレゴリオス、イエーガー、そして久保正彰教授

久保正彰教授の米寿祝賀論集のための拙文を準備するにあたり、学生時代に親しく拝読した久保教授の随想を3点、本学・筑波大学の図書館から記憶を頼りに探し出し、コピーした。まず第1点は『ユリイカ』1982年8月号（特集・ギリシア悲劇）93-99頁に載る「ギリシア悲劇の恩師たち」であり、第2点は『西洋古典学研究』第4号（1956年）100-106頁に載る「五人のΦΙΛΟΛΟΓΟΙ」である。そして第3点は同じく『西洋古典学研究』第12号（1964年）110-113頁に載る「Center for Hellenic Studiesについて」である。久保教授によるこれら3点の随想・報告文には共通点がある。これら3点にはい

ずれも、久保教授によるヴェルナー・イエーガーへの言及が見られるのである。

久保正彰教授米寿記念論集のための原稿締切は当初、上述のように2017年9月30日に定められていた。そして2018年（9月4日～7日）にパリで開催された第14回国際ニュッサのグレゴリオス学会のためのレジメ提出期限が、この久保教授の記念論集と時を同じくして設定されていた。筆者は前回の第13回大会（ローマ・サンタ・クロチェ大学；2014年9月17日～20日）において、初めてこの学会で口頭発表を行った（題目は「ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』に見る終末論的特質」）。この大会での口頭発表が、形を変えて『ストゥディア・パトリスティカ』誌の特別号に掲載されることになった次第については、上述のとおりである。このローマ大会のためには、筆者が1991年4月より東大駒場の助手を勤める以前、後に学位論文の指導主査となる宮本久雄教授（1945- ）の下で全15講話のうち末尾3講話を訳出した『雅歌講話』が中心テーマに選ばれていた（秋山1991）。『ストゥディア・パトリスティカ』誌・特別号の書名は『ニュッサのグレゴリオスによる神秘主義的終末論』、執筆者は総勢16名である。拙稿の題目は「『雅歌講話』におけるヨハネ的終末論」であるが、執筆者メンバーの中には、マスペロ師とともにローマ大会以来お世話になっているイラリア・ヴィゴレリ氏（サンタ・クロチェ大学）とミゲル・ブルガロラス師（スペイン・パンプローナ大学）、教父学関係の学会でしばしばお目にかかるイレネ・アルテミ氏（アテネ国立大学）やヴィト・リモネ氏（ミラノ・聖ラファエレ大学）といった友人たちの名前も見える。一方パリ大会では、主催者のマチウ・カッサン教授の主唱により、これまで取り上げられることのなかったグレゴリオスの新約聖書関係の著作が扱われることになり、全5講話より成る『主の祈りについて』が中心テーマとして設定されていた。

ニュッサのグレゴリオスと言えば、20世紀におけるギリシア教父学隆盛の中心舞台を成す教父である。グレゴリオス研究は、第2ヴァティカン公会議（1962-65）を主導した「新教父学運動」の旗手、ジャン・ダニエルー枢機卿（1905-1984）を初めとするフランス系神学者たちを一方の核とする一方、18／9世紀より連綿と伝わるドイツ系古典文献学の立場を代表する存在として、ヴェルナー・イエーガーをもう一方の核に抱くと言える。筆者にとって、久保教授は何よりもまず、このイエーガーの息吹を伝える方である。

以下旧稿では、筆者の記憶を呼び覚ます形で、国外では主として神学（教父

学・聖書学)へと収斂しつつある自らの略歴を顧みながら、久保教授との折々の交わりを織り交ぜ、拙文をしたためることになった。

## 2. イェーガーについて

上にも触れたように、久保正彰教授はハーヴァード大学において、イェーガーの薫陶を受けておられる。イェーガーは1936年、ドイツからアメリカに移住したと聞が、当初勤務したシカゴ大学から、1939年にはハーヴァード大学のギリシア学講座教授に転じ、没年まで当地にて過ごしている。イェーガーによるニュッサのグレゴリオス研究は、1921年に早くもブリル社から『エウノミオス駁論』の校訂版が出版されていることから推して、第1次世界大戦当時からすでにドイツにおいて開始されていた模様である。これを承けたハーヴァード大学の古典学研究所は(久保教授の文面から推すならば)、おそらく実質的に、イェーガーの創始になるグレゴリオス校訂事業を継続する部門と、古典古代ギリシア学を教授研究する部門に分かたれていた模様であり、このことは先に引いた久保教授の「Center for Hellenic Studiesについて」の中に仄めかされている(久保1964:100)。イェーガーがハーヴァード大学で、その主たる時間と労力を割いて携わったのは、グレゴリオスの全集公刊(2019年現在、最後の一卷『人間創造論』を未刊のまま残すのみ)を本格化させ軌道に乗せることであったはずである。主著にして大著である『パイディア』(全3巻; Jaeger 1936-1947)に代表されるような古典古代期の研究以外に、古代末期に関わる文献学の事績として、イェーガーがギリシア教父ニュッサのグレゴリオスの校訂事業に打ち込んだことは、実に画期的かつ歴史的なトピックであったと筆者には思える。久保教授が、東京大学文学部教授として初めて筆者と面談して下さったのは、筆者が学部2年生、駒場から本郷に進学するのを前にした1983年のことであった。筆者はまずイェーガーのことを質問したのを覚えている。その質問に対し、久保教授は「イェーガー先生は、ハーヴァード大学のギリシア語の先生でした」とだけおっしゃった。それに先立ち、久保教授は海外での修練の時期をたびたび回想されているが、先に挙げた3点は、久保教授が恩師の方々を回顧される中で、イェーガーについて言及されたものである。

### 3. イェーガーの後継者としての久保正彰教授

久保教授はそれ以降、東大文学部での授業中に、イェーガーについて言及されることはほとんどなかった。たまに触れられる際にも、イェーガーがハーヴァードで勤しんでいたに違いないニュッサのグレゴリオスやギリシア教父などについては、まったくと言ってよいほど話されなかった。言うまでもなく、学部・大学院の演習にグレゴリオスやギリシア教父が取り上げられることもなかった。ただ筆者にとって、先に挙げた「ギリシア悲劇の恩師たち」の中で、次のように述べるイェーガーの言葉を久保教授が書き留めて下さっていたことは、ギリシア語教会文献（この名称は、ある年の賀状の中で久保教授から頂いた）の研究を展開する中で、重い導きの星となってきた。「（イェーガー）先生は当時、ニサのグレゴリオスの校訂出版の最終段階に達していたが、ギリシア文学の写本研究にとっては、初期キリスト教教父らの写本の知識が必須のものであることを、いつも結びの言葉としておられた。中世の写本所で生きていた同じ人間が、デモステネスの写本を写し、グレゴリオスの書簡を写している場合があり、どちらかの写本の年代決定に手がかりを与えるからである、と」（久保 1982：94）。

久保教授を創設者とする東大文学部西洋古典学科にあって、その学統を継ぐ方々の中にも、久保教授の学統ということとはともかく、イェーガーの、しかもその教父文献学研究の学統を継承することを意識する方は見当たらない。しかしながら上にも触れたように、1984年に文学部生となった筆者にとって、当初より久保教授はもっぱら「イェーガーのお弟子さん」という位置づけであった。久保教授に師事すれば、筆者は曲がりなりにも「イェーガーの孫弟子」になれるのである。

ところで、中学・高校を神戸のイエズス会の学院で過ごした筆者には、高校時代の後半に、学年担任であり公教要理担当だったスペイン人のサトゥルニーノ・オチョア神父（1937- ）から「ビザンティン・カトリック」ないし「ギリシア・カトリック」というものの存在を耳にしてから、この（ローマ・カトリックではない）不思議な名称が記憶の片隅にずっと残ったままになっていた。大学入学当初よりギリシア語・ラテン語を履修し、西洋古典学専修課程に進学したものの、いま思い起こせば、筆者にとって、古代ギリシア・ラテン文学の著作家の作品講読演習は、結局「基礎学」に終始すべきものだったのかも知れない。現勤務校である本学・筑波大学には、中山恒夫先生（1933- ）の

わが身に余るご推挙により、古典語ポスト担当者として赴任できたし、いまでも古典語の初歩・講読クラス、そして西洋古典文学史の講義に関しては、まったく苦にならずに果たせている。これも、東大文学部と大学院において、ひととおり古典作品を通覧しておいたお陰であろう。もっとも正直に申せば、大学1・2年の頃、ギリシア教父特にニュッサのグレゴリオスの名を知ることになり、それに伴ってグレゴリオスの校訂者としてのイエーガーの名を聞いてから、当時久保教授がいくつかお書きになっていた随想の類（上掲の『ユリイカ』など）を目にして、筆者は「イエーガーの孫弟子になるべく」東大文学部の西洋古典学科に進学したのだ、といまでは自ら納得している。もとよりそのかわり、欧米で開催される学会に参加するようになり、S. J. を名乗る年配の神父たちが、イエズス会による強力な牽引のもとに行われてきた古典教育の伝統を骨の髄まで体現していることに関しては、これをあらためて強く実感するようになっている。

このように、東大文学部の西洋古典学科に進学したことは、見方によっては筆者の「誤解」に基づく行動であったかも知れない。だがもう一つの「誤解」が筆者には影響していた。それは2017年の5月下旬に他界された野町啓・筑波大学名誉教授（1933-2017）に関わることである。野町先生は、周知のようにイエーガーの最晩年の名著『初期キリスト教とパイディア』（野町1964；原著Jaeger 1961）の邦訳を上梓しておられるが、その「あとがき」の中でこう記しておられる。「“パイディア”という一つの理念の下に、古典古代とキリスト教世界の連続性を跡づけ、立証し、恩師ウィラモウィツから受けついだ文献学的な基礎に基づいて、精神史としてまとめあげることは、彼（イエーガー）の終生の目標であったといってよい。また、このような問題意識は、彼のカトリック教徒としての立場を、反映するものといえよう」（野町1964：187）。筆者は1982年に東大に入学した後、まもなくこの書を手にとったが、この一節に出会って以降、イエーガーはカトリック教徒であると信じ込んでいた。だが野町先生は、筆者が筑波大学に赴任した後、ご自宅で夕食を御馳走して下さったおりに、この一節が先生の誤解によるものであったことを表明された。久保教授も「五人のΦΙΛΟΛΟΓΟΙ」の中で、そう判るような書き方をしておられる（久保1956：100-101）。それはともかく、野町先生も記しておられるように、イエーガーが古典の基礎教養をたたき込まれたのは、トマス・ア・ケンピス（1379-1471）を守護聖人とするギムナジウム時代であったことは間違いがなく、中等教育における鍛錬が、長じて以降のイエーガーのあり方に大きく作用



していることに異論の余地はない。

#### 4. ハンガリーでの在外研究とハンガリー教父学会

ところで、上で述べた「ビザンティン・カトリック」ないし「ギリシア・カトリック」の幻影は、筆者が1991年から97年秋まで東大教養学部古典語教室の助手を務めた後、97年秋に奉職した筑波大学において、本格的な形で筆者の前に立ち現れることになった。筑波大学には、東大のように「西洋古典学」という括りによる教育組織はないが、故柳沼重剛先生（1926-2008）、上述の中山恒夫先生の後を受けて、筆者が西洋古典担当の3代目を務めている。この古典文学講座のほか、上述の故野町啓先生（倫理学）、故廣川洋一先生（1936-2019；哲学）が教鞭を執っておられたため、イエーガーの古典学を継承したい筆者にとっては、当初より格好の環境となってきた。さらに現在では、古代史学担当あるいは古代哲学担当の教員も学外に転出したため、事実上筆者が「古典古代学」全般を担当せねばならない状況にある、ないしそのように自負している。加えて、旧約聖書学者の池田裕先生（1940- ）は、赴任間もない頃の筆者を2年間にわたり、人文学類の旧約聖書ヘブライ語文法担当者に指名してくださった。旧約のヘブライ語については、駒場の助手であった頃に「全学ゼミ」で2年ほど担当した記憶があるが、言うまでもなく教父学にとって聖書学は基礎的部門であるため、池田裕先生のご厚意は大変有り難かった。このように、古代学・古典学全般を俯瞰すべき立場からすれば、今日までイエーガーの足跡は格好の「導きの星」となっている。

昨今では極めて限られたチャンスしかない「助手」職を駒場で6年半勤め、その後空白期間なく筑波大学に赴任できたこともあって、筆者は海外留学をする機会に恵まれなかった。だが2005年から翌年にかけて、筑波大学長期派遣により、筆者は幸いにしてハンガリー・ニーレジハーザにあるギリシア・カトリック教会の神学院・兼司祭養成セミナリウムに在外研究のため滞在することになった。留学の地をハンガリーに定めたことには、後になってみるとさまざまな理由を加えることができるが、当初考えていたのは、とにかく「ビザンティン典礼を実地に体験したい」という切実な願いであった。「体験」というのは、単に見聞することだけを意味するのではない。日本にはギリシア・カトリックの共同体が存在しないため、ビザンティン典礼の体験は海外で経る以外にないのであるが、ギリシアが正教圏である以上、中・東欧のどこかに留学す

ることでこの「体験」を積み重ねなければならない。後に判明したことであるが、この面においてハンガリーのギリシア・カトリック共同体は特異な位置にあった。1912年設立になるハンガリー・ハイドゥードログ司教区では、各国の国語が典礼言語として認可される第2ヴァティカン公会議後の1965年まで、典礼認可言語は「古典ギリシア語」と定められていたのである。つまり第2ヴァティカン公会議以前、典礼のためのハンガリー語使用が禁じられていたため、彼らハンガリー人のギリシア・カトリック教徒たちは、(形式上)古典ギリシア語により聖ヨハネス・クリュソストモス典礼や聖バジル典礼を執り行うように命じられていたのである。この点は、周辺のスラヴ諸国が教会スラヴ語により公的にも難なく典礼を執行し得たのとは異なる、涙ぐましい一面であった。筆者が在外研究当初より師事してきた同教区の司祭イヴァンチョー・イシュトヴァーン教授(1953- ; 2004年から2014年まで教皇庁国際神学委員会委員; 師による主著の拙評は2019年刊の『中世思想研究』第61号を参照)によれば、神学院で実際に典礼語として古典ギリシア語が教授されたことはなく、古代ギリシア語は新約聖書研究のための科目であったという(詳しくは秋山2010)。だがともかく、ハンガリーの同共同体の典礼言語が古典ギリシア語であったということは、ギリシア以外の国に在外体験を求めようとする古典学徒にとっては、象徴的な意味においてであれ、願ってもなく幸甚なことであった。

なおこの2005年には、ニーレジハーザに滞在する直前の夏に、同国ペーチで国際オリゲネス学会第9回大会が行われたため、向学のためこれに参加した。そこで親交を得たのが、ペーチ大学のショモシュ・ローベルト教授(哲学; 1958-)とヘイドル・ジュルジ教授(美学; 1967-)である。ショモシュ氏については『中世思想研究』第48号(2006)・第53号(2011)に、ヘイドル氏については、同誌第54号(2012)に、それぞれの著書に関する拙評が載る。

彼らペーチ大学の二人との交流は、2006年の帰国後にも筆者がハンガリー教父学会(当時年次大会は中部のケチケメートで開催されていた)で同年から口頭発表を始めたため、継続することになった(Akiyama 2012b, 2014a, 2014b)。彼らはもちろん、いずれも同学会の主要メンバーである。彼らは、筆者の中では「ケチケメート・メンバー」として記憶されているのであるが、この「ケチケメート・メンバー」の中には、後に同国セグドでの国際聖書学会においてしばしばお目にかかることになるペレンディ・ラースロー師



(1954-) の姿もあった。ペレンディ師の主著については『中世思想研究』第 58 号 (2016) に拙評が載る。この学会を含め、筆者はハンガリー国内で学会が開催される際には必ず、ハンガリー語で口頭発表を行うことにしている。ハンガリー語はアジア系言語のため、前置詞がなくすべて後置構造であり、日本語と語順が酷似する。筆者が最初にハンガリー語を用いたのは、留学中の 2005 年 10 月、ニーレジハーザの神学院内で依頼されて行った講演においてであったが (題目は「日本におけるギリシア教父学の意義と可能性」; Akiyama 2006), その次第を久保教授にお葉書で報告すると、久保教授はそれを日本学士院の盟友・新約聖書学者の荒井献教授 (1930-) にお見せになったようで、荒井教授は驚いておられたとのことである。

ケチケメートの大会には、2008 年ごろからだったであろうか、イタリア人のモレノ・モラニ教授 (1946-) が招かれるようになった (発表は仏語)。モラニ教授は古典言語学者でアルメニア語にも通じ、トイプナー叢書よりエメサのネメシオスの校訂版を出版しておられる。モラニ氏の事績については『中世思想研究』第 57 号 (2015) に拙評が載る。後で記すように、2016 年春筆者がボローニャ大学に招かれたおり、モラニ氏も筆者の招聘に加わってくだった。

## 5. 国際オリゲネス学会

ハンガリー国内の学会は別にして、筆者が初めてハンガリー語以外の言語で発表をしたのが、ペーチ大会の 4 年後、ポーランド・クラクフで行われた第 10 回国際オリゲネス学会であった (2009 年)。この大会での口頭発表は初めてであったにも関わらず、主催者のヘンリク・ピエトラス師 (ポーランド人イエズス会士; 1954-) は、筆者をあるセッションのチェアに指名していた。推測するに、これは筆者がイタリア語で口頭発表を行う旨申請し (題目は「オリゲネス『エゼキエル書講話』における真の<予型>」; Akiyama 2011b), 多言語に対応できると判断されたためであろうか。以降筆者は、ハンガリー以外では発表言語にイタリア語を用いることにしている。これは前述のニーレジハーザ神学院が、ローマのオリエンターレ研究学院 (これもイエズス会の運営になる) とアフィリエーションを結んでいて、イヴァンチョー師をはじめ、教授陣が全員流暢にイタリア語を話すことにもよる。発表と司会の大役を無事終え、筆者はクラクフから久保教授に絵葉書をお出した。すると久保教授は、

クラブでの国際学士院連合の会合の思い出などを綴られた長文のお返事を自宅あてに送って下さり、帰国後感激のうちに拝読したことが思い起こされる。

この学会で知己を得たのが、国際オリゲネス学会（名誉）会長を務めておられるボローニャ大学名誉教授のロレンツォ・ペッローネ氏（1946- ）である。ペッローネ氏とは、最近では2017年に南米アルゼンチンのサン・ファンで行われた第2回（中南米）国際教父学研究集会でもお目にかかった（筆者の発表題目は「14日派と、クムラン共同体で読まれていた『イザヤ書』のテキスト」）。クラブの4年後、2013年の第11回国際オリゲネス学会はデンマークのオーフスで行われたが（筆者の題目は「大グレゴリウス教皇『エゼキエル書講話』における預言の神秘的意味」；Akiyama 2016b）。オーフス大会では発表終了後、わざわざ上掲のマスペロ師（師と面識を得たのは、このオーフスが最初の機会となった）が、“Complimenti!”と賛辞を告げて来てくれた。マスペロ師はまさしく、現在のニュッサのグレゴリオス研究を国際的に牽引する第一人者であるが、師の事績については『中世思想研究』第59号（2017）に拙評が載る。師は2016年、ボローニャ大学で教父学研究グループ「パトレス」の大会が行われた際、中心となって筆者に講演の依頼をして下さった（後述）。

## 6. セゲド国際聖書学会

ところで、ハンガリーでの教父学研究の成果公表が軌道に乗り始めたこともあって、2009年であったと思うが、口頭発表に適した同国の聖書学会はないものだろうか、と上掲のイヴァンチョー神父の同僚で聖書学教授のガーニッツ・エンドレ師（1973- ）に尋ねてみた。するとガーニッツ師は直ちに「毎年セゲドでベニック師が開催しているセゲド国際聖書学会がそれだ」とお返事を下さった。以降原則的に毎年、筆者はこのセゲド国際聖書学会で口頭発表を行っていて、2019年で計10度目となる（公刊分についてはAkiyama 2010, 2011a, 2012a, 2013, 2014c, 2016c, 2017a, 2018, 2019b）。ベニック・ジュルジ師（1952- ）はローマ・カトリックの司祭であるが、この学会は、ハンガリーのカトリック・プロテスタントばかりでなく、同国のユダヤ教関係者や近隣諸国の正教、イスラム教徒など、実に多種多様な宗教的伝承を担う聖書学者たちが集う、真にエキュメニカルな国際学会である。まず、この学会で毎年再会できるのが楽しみな友人としては、教義学者でブダペシュトのパーズマニ・

ペーテル大学教授クラニーツ・ミハーィ師 (1959- ) がいる。師の著書については『中世思想研究』第 55 号 (2013) に拙評が載る。クラニーツ師はこの拙評をたいへん喜んで下さり、翌 2014 年 9 月、筆者はパーズマニ大学に招かれてハンガリー語で講演を行うことになった (題目は「17 世紀初頭における迫害下日本でのキリスト教徒たちと彼らの教え」; 論文化したものは秋山 2015)。また筆者にとっては、ふだんお目にかかることのできないユダヤ教関係の方々との親交が嬉しい。特にセーチ・ヨージェフ氏とは、毎年親しくお話ししている (氏の事績に関する拙評は、2014 年の『中世思想研究』第 56 号を参照)。あわせてハンガリーの近隣には、1920 年のトリアノン条約以降、国外在住となったハンガリー語母語話者が極めて多数見出される。彼らとの交流の中で、国籍を超えてハンガリー語を学問用語として用い続けることの意味とは何か、といった、日本人のわれわれがあまり切実に考えることのないような問いを突きつけられ、筆者は、言語と宗教が深く関わるナショナル・アイデンティティの問題を考えさせられることになった。

筆者は、さまざまな理由から、東大では前述の荒井献教授が主宰しておられた初期キリスト教文学のゼミに出席することがなかった。ただ、イエーガーの教父学研究までを射程に収める古典古代学を継承するためには、当然のことながら聖書学はその核心を形成せねばならない。現在では筆者は、原則としてイタリア語とハンガリー語で、教父学と聖書学の論考をそれぞれ年間にほぼ 1 本ずつ発表することを自らに課している。もっとも、セゲド国際聖書学会でハンガリー語を用いることができるのは口頭発表までであり、2017 年以降、決定稿を提出する際には英・独語のいずれかを用いることが義務づけられるようになった。このセゲド国際聖書学会では、まったく思いがけず、2011 年の「会友表彰」なる受賞にも与った。日本で研鑽を積むことのできなかつた聖書学の知見をハンガリーで蓄積できることは、筆者にとって望外の幸せである。そしてこの間、新米の助手だった頃に荒井教授が勧めて下さった 4 年に一度のオクスフォード国際教父学会大会でも、2015 年の第 17 回大会で初めての口頭発表を果たし (題目は「アレクサンドリアのクレメンスによる《ひとり子なる神》を通じての聖書解釈」; Akiyama 2017c)、さらに 4 年後、2019 年 8 月の第 18 回大会においても、二度目の口頭発表を行うことができた (題目は「アレクサンドリアのクレメンスにおける「賢慮」と「感覚の霊」」)。2019 年の大会の際には、先述のペレンディ師のお誘いにより、ハンガリーの「ケチケメート・メンバー」たちと、オクスフォード郊外のパブで再会することになった。

## 7. 教父学研究グループ「パトレス」(ボローニャ大学)

さて上にも触れたように、ジュリオ・マスペロ師、モレノ・モラニ氏、そして側面からはロレンツォ・ペッローネ氏や、国際オリゲネス学会オーフス大会で筆者の発表を司会して下さったエマヌエラ・プリンツィヴァッリ教授(ローマ大学)の推挙もあって、2016年4月、ボローニャ大学を拠点とし同大学のアンジェラ・マリア・マッツァンティ教授を中心とする教父学研究グループ「パトレス」による研究集会において、口頭発表(講演)をするよう依頼があった。この拙稿を含む論集は、サンタ・クローチェ大学出版局より『古代末期における危機と変貌：現代からの省察』として、2017年に公刊されている(筆者の講演題目は「福音記者ヨハネとギリシア教父たちの解釈による《いと高き者の聖者たちに下される「裁き」》(ダニエル7,22)の意味」; Akiyama 2017b)。

このグループは、神学者や教父学者たちを事実上のメンバーとしながらも、明確な形で神学的主張を表明するのではなく、むしろ古典学・ヒューマニズムを通じた学術研究というかたちで時代の要請にこたえてゆこうという主張をもった、極めて伝統的・ヨーロッパ的な学会である。筆者はこの2016年の大会で、やはり招待講演者として登壇されたミュンスター大学名誉教授(古典学)クリスティアン・グニルカ氏(1936-)と初めてお目にかかることができた。グニルカ教授は、名著『クレシス(使用)』の著者、あるいは後4世紀のキリスト教ラテン詩人プルデンティウスの研究者として国際的に有名な方であるが、2001年に筆者が1冊目の拙著(秋山2001)を刊行した際に『クレシス』から引用したこともあり、早くからその学風には親しんでいた。そのため、ボローニャ以降親交を結ぶに至り、教授の80歳を記念しての献呈記念論文集には筆者も寄稿を求められることになった。これはマルクス・ミュルケ氏の編集により『クレシマ(Chrésima): 初期キリスト教における類例を通じての「使用」の研究』としてデ・グレイテル社より2019年に刊行されている(筆者の執筆部分は「アレクサンドリアのクレメンスによる「覚知者」と「使用」」; Akiyama 2019a)。

この「パトレス」グループは、自らの方向性に沿う先駆者として、早くからイエーガーに着目してきたという点でもユニークな特質を持つ。イエーガーの事績を多方面から検証しその学的貢献を評価する試みとしては、拙見の限りではウィリアム・M. コールダーⅢ世の編纂になる『ヴェルナー・イエーガー再

考』(Calder III 1992)があるが、この「パトレス」グループは、ちょうど日本では故野町教授が邦訳を出版された『初期キリスト教とギリシアのパイデシア』(原著 Jaeger 1961)が2011年に公刊50周年を迎えるのを記念して、2013年にボンピアーニ社からアルフレド・ヴァルヴォ氏(ミラノ・カトリック大学ローマ史・ラテン碑文学教授)による編集のもとに、『ヴェルナー・イエーガー：初期キリスト教とギリシアのパイデシア 付：複数の執筆者による補足論文』(Valvo 2013)を刊行している。この書には、シルヴァノ・ボスケリーニ氏によるイタリア語訳がイエーガーの原著作と対訳のかたちで収録され、それに続いて計10人の研究者による参考論文が付されている。この10人は上掲した「パトレス」グループの主要メンバーである。2016年4月の大会では、そのうちアンジェラ・マリア・マッツァンティ教授に加えてヴァルヴォ氏(上掲)、イザベル・デ・アンディア教授、ジュゼッペ・フィデリブス氏、レオナルド・ルガレーズィ氏、そして上述のジュリオ・マスペロ師とモレノ・モラニ氏にお目にかかることができた。

すなわちヨーロッパでは(ないし少なくともイタリアでは)、イエーガーの著作のうち、特に『初期キリスト教とギリシアのパイデシア』に特別な意味を見出そうとする視座があるように思える。これはひとえに、イエーガーがアリストテレスほかに関する古典学者として出発し、『パイデシア』の大著を完成させつつ、その傍らニュッサのグレゴリオス研究に打ち込み、最晩年の講演の題目には『初期キリスト教とギリシアのパイデシア』を選ぶという、他の古典学者ではなしえなかったような稀有な軌跡を描くヒューマニストであったということに由来するものであろう。そして久保正彰教授は、このようなイエーガーの息吹を伝えるメッセンジャーとして東大に赴任されたと筆者は考えている。

## 8. 国際ニュッサのグレゴリオス学会と『主の祈りについて』

冒頭にも触れたように、筆者は「旧稿」をしたためる一方で、2018年にパリで開催された第14回国際ニュッサのグレゴリオス学会に向けてエントリートを準備していた。大会のテーマは『主の祈りについて』であったが、全5講話より成るこの著作については、第3講話の後半に大きなテキスト上の問題があり、古来論争を引き起こしてきた。そしてイエーガーには、この箇所のテキストについて論じた論考「グレゴリオスの著作『主の祈りについて』の本文へ

の教義学上の書き入れ、およびその教会政治的な背景について」がある。この論文是最晩年のものであり、執筆者自身による校正は経ていないとのことであるが、1966年にブリル社からハインリッヒ・デリースの編纂により遺作として出版された『ニュッサのグレゴリオスの聖霊論』のうちに収められている(Jaeger 1966: 122-153)。筆者は試みに、この論文におけるイエーガーのテキスト校訂案に異を唱えてみたい。

ニュッサのグレゴリオスによる講話『主の祈りについて』は言うまでもなく、『マタイ福音書』第6章9節から13節に載る「主祷文」について、一句ごとにグレゴリオスの解釈を展開した講話である。そして第3講話は「御名の聖とされんことを。御国の来たらんことを」という一節(9-10節)を解釈した部分に相当する。ただし主祷文には『ルカ福音書』第11章2-4節に載る短い版もあり、また「御国の来たらんことを」という一節に関して、『ルカ福音書』には「あなたの聖なる霊がわれらの上に来たり、われらを浄めたまわんことを」という異文テキストが存在する。グレゴリオスはこの異文について、三位一体論ないし聖霊論との関連で論及を行う。問題箇所には先行する部分から訳出するなら、グレゴリオスは次のように述べている(下線部筆者)。

「というのも聖なる書にあっては、子は<父から生まれたひとり子>と名づけられている。そしてこのような形で、御言葉は子に、その特質を定めている。一方聖霊は<父から発す>と語られ、<子からも出る>と加えて証言されている。というのも<誰か、キリストの霊を有していない者がいれば>、使徒は言う、<彼はキリストには属さない>と(ローマ8,9)。したがって霊は、もし神から来たるのであれば、それはキリストの霊でもある。しかるに子は神から生まれたなら、もはや霊に属することはないし、<霊に属す>と語られることもない。そしてこの関係性の順序が逆転することもない。つまり、陳述を分断し逆転させることは、同じように可能なわけではないため、ちょうど<霊がキリストに属す>と語られるのと同じようなかたちで、<キリストも霊に属す>と名づけられることはできないのである」(GNO VII/ii 43,26-44,9)。

ただ『ニュッサのグレゴリオス全集』(GNO)における『主の祈りについて』の担当者J.F.カラハン氏は、下線を付した「からも」の部分に□マーク(削除記号)を付し「聖霊は父から出ると語られ、子に属すとも加えて証言されている」と読めるかたちに校訂している。関係する箇所についてのみ、原文のギリシア語を示しておくと、カラハン氏は“τὸ δὲ ἅγιον πνεῦμα καὶ ἐκ τοῦ πατρὸς λέγεται καὶ [ἐκ] τοῦ υἱοῦ εἶναι προσμαρτυρεῖται。”と校訂するのである。



筆者は寡聞にしてカラハン氏の経歴を知らない。だがイエーガーが監修を務める『ニュッサのグレゴリオス全集』の分冊担当者でもあり、当然、イエーガー膝下にあった研究者であろう。実際、上掲したイエーガーの遺作『ニュッサのグレゴリオスの聖霊論』に収録された論考を読む限り、このカラハン氏の結論と同趣旨の論が展開されている。つまりイエーガーは、この箇所で「霊は子からも出る」という読み方を採ることはしないのである。

## 9. 「子からも」

聖霊論をめぐる信仰箇条における東西教会間の相違（東「聖霊は父より子を通して発出する」；西「聖霊は父と子より発出する」，後者のラテン語文から「Filioque 問題」と呼ばれる）に関しては，両者の間に修復しがたい相違対立が生まれ，教会史の上に影を落としてきた。これは9世紀ごろ，いわゆる「フォティオス問題」（フォティオスはコンスタンティノポリス総大司教，在位858-867；877-886）との関係で深刻化したものである。東方においても，聖霊の位置づけに関しては様々な考え方があるが，ここで取り上げるグレゴリオスのテキストは，直接この定式に関わるため，古典文献学上の本文校訂に留まらず，神学にまで不可避的に問題が波及する。

そもそもグレゴリオスによるこの箇所を含む一節，すなわち GNO VII/ii 42,9 から 43,15 までは，ミーニュによる『ギリシア教父叢書』（PG）では『主の祈りについて』（PG44）の中に含められておらず，「断片」扱いである（PG46,1109）。しかしながらアンジェロ・マイ枢機卿（1782-1854）が1833年，初めて『主の祈りについて』第3講話の一部として「古代著作家新集成」を出版した（*Scriptorum veterum nova collectio* VII, 1, 6-73）。

いまカラハン氏による諸本・異読一覧を参照すると，この『主の祈りについて』の写本系統を構成する二つのグループΦとΨのうち，まずΦグループに属するのがV, W, Mという3つの写本，一方Ψグループに属するのがO, K, Rという3つの写本であり，VはVaticanus Gr. 2066, WはVaticanus Gr. 448, MはMessanensis 80, OはMonacensis Gr. 370, KはVenetus 67, RはMonacensis Gr. 107である。このほかこの箇所にはE写本（Parisinus Coislinianus Gr. 58）およびシリア語訳Z, Σが関わる（ZはVaticanus Syr. 106, ΣはMus. Britan. Syr. 564；いずれも6世紀の成立とされる）。問題のἐκに関しては，以上のうちV, W, M, O, E, Z, Σがこれを読んでいるが，W, M, O,

Eの4写本はこの  $\epsilon\kappa$  に削除マークを付しているという。すると削除記号を付さずにこの箇所にも  $\epsilon\kappa$  を読んでいるのは、シリア語訳2写本のほか、ギリシア語写本ではヴァティカン所蔵の2066番のみということになるが、これは写本類の中で筆頭に挙がり、おそらく最古のものだとされる。

かくして、マイ枢機卿はこのVaticanus Gr. 2066から『主の祈りについて』の本文を起こし、その際に  $\epsilon\kappa$  を残したということになる。カラハン氏はこの写本の成立年代を9世紀ごろとしており、これでは前述の「フォティオス問題」との関連が不明であるが、筆者はシリア語訳の成立年代が6世紀ごろと考えられることを重視したい。イエーガーがシリア語写本まで射程に収めて文献学を展開していたという証拠は見当たらないが、カラハン氏はシリア語写本のデータを踏まえている。そのためカラハン氏は「古文書学的証拠に基づく限り、われわれは  $\epsilon\kappa$  が原著作にあったと結論づけねばならないが、グレゴリオスの立論から推して、この  $\epsilon\kappa$  は原文になかったものと推定される。したがって [] を付した」とする (Callahan 1992:xii)。カラハン氏の立論の背景には、イエーガーによる推論がある。イエーガーはグレゴリオスによる別の著作『聖霊論：マケドニオス派の聖霊反対論者を駁す』GNO III/i 89,25-90.1) を参照し、ここに “τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον, ὅτι ἐκ τοῦ θεοῦ ἐστὶ καὶ τοῦ Χριστοῦ ἐστὶ, καθὼς γέγραπται” とあることから、両者を並行箇所と理解し、ひるがえって『主の祈りについて』の  $\epsilon\kappa$  をも削除するのである (Jaeger 1966:143-144)。

## 10. Vaticanus Gr. 2066

ちなみにマイ枢機卿が依拠したヴァティカン所蔵の写本Vaticanus Gr. 2066に関しては、イエーガーによる優れた関連論文がある（「ワシントン・アメリカ議会図書館所蔵・ギリシア語アンシャル体断片」、初出は *Traditio* 5, 1947, 79-102; Jaeger 1960:355-387 に再録; 本稿では後者から引用）。イエーガー自身の弁によれば、ワシントンで2葉より成るアンシャル体のギリシア語写本を手にしたが、これが末尾部の失われたVaticanus Gr. 2066の一部を成すものであるということ、その特徴的なアンシャル書体から解明しえたとのことである。イエーガーは結論として、2葉より成るこのワシントンの断片は、316葉より成るVaticanus Gr. 2066のうち、最末尾(299r-316v)に収められている『人間創造論』（全30章のうち前半12章までを載録）の第16章(PG44,180B-181B)、および第18・19章(PG44,196A-197A)にそれぞれ該

当するとしている。

イエーガーによれば、Vaticanus Gr. 2066 は、カラブリア州ロッサーノのパティリオンにある聖バジリオ修道会聖マリア修道院が元来所蔵していた、一大グループをなす写本類の一つである。ロッサーノは、中世から中世過ぎにかけて、南イタリアに形成されたギリシア的伝統と文化の中心を成す場所であった (Jaeger 1960 : 360-361)。そしてバジリオ会の修道院は、ノルマン人やサラセン人の襲来の前に衰退してゆくこの伝統文化を死守する砦としての役割を負っていたという。16 世紀の後半になって、枢機卿シルレト (1514-1585 ; 後のヴァティカン図書館長) がこの蔵書をヴァティカンに移し、その動きは以降も継続されたが、最終的に 17 世紀の末、現存する蔵書類がローマのバジリウス・デ・ウルベ修道院に移され、続いて 1780 年にヴァティカンに移されたとされる。

## 11. キリストの復活に基づく現在終末論をめぐる

文献学者としてのイエーガーの姿勢は、古典古代の文献だけでなく、このように教父神学文献に対しても徹底して貫かれていて、久保教授を通じて、間接的にであれその学風に触れることができたのは、筆者にとってまことに貴重な経験であった。イエーガーは次のように記している。「われわれにとって重要なのは、教義上の真理ではなく、テキストへの書き入れの歴史でもなく、グレゴリオス自身の見解である」 (Jaeger 1966 : 142)。この考え方は、正真正銘の文献学者のものである。しかしながら、その背後にはアリストテレス研究から出発したイエーガーの (いわば) 「個別主義」があるように筆者には思える。このイエーガーの姿勢は、古典文献の著者個々人が各々異なった見解を懐いていることを前提とするものであり、もちろん古典古代期であれば、この前提には何の問題も生じない。しかしながら、神学に関わる文献であれば、上の一節の「われわれにとって重要なのは、グレゴリオス自身の見解である」と言い切ることが、拙速な独善的判断に直結するといった場合はないだろうか。

筆者は、キリスト教特に東方ビザンティン典礼に由来する神学の特徴は、十字架の崇敬を基軸点とするその現在終末論であると考えている。このことは、ビザンティン典礼の聖体祭儀にあって、聖体を十字架上に置くその神学に典型的に表れているように思われる (秋山 2010)。ただこれは、生者と死者との交わりの場としての十字架を中心軸とする表現であり、十字架上に懸かったキリ

スト（死の像に見える）をめぐり、その脇腹から溢れる「血と水」（ヨハネ 19,34）のうちに「生命」を見出してはじめて成立する考え方である。従って修道院のように、いわば「天国」界を具現化しつつ、かつそこで成員たちが日常生活を刻んでゆかねばならない現実のもとでは、より持続的な生命が必要となる。つまり、十字架を突き抜け、さらにその向こうに日常生活が広がっていなければ、たとえ写本筆写のような行為ですら、実現することはないのである。

このことの典拠をまず、グレゴリオス自身の文脈に探してみよう。すると「子は神から生まれたなら、もはや霊に属することはない」という上掲の一節が該当しよう。「子が神から生まれる」とは、キリストが復活後の生命体として現前することを指すのではないだろうか。さらにこの典拠を聖書に求めるならば、『ヨハネ福音書』20,22が挙げられよう。「＜あなた方に平和があるように＞」。イエスはそう言いながら、彼らに息を吹きかけて言った。「＜聖霊を受けよ＞」。これは復活後のイエスが語る言葉である。ここで明確に、復活後のイエスが自らの息吹を弟子たちに吹きかける次第が記されている。すなわちこれこそ『ヨハネ福音書』における聖霊降臨であり、使徒たちが誕生する場面だと言えよう。つまり「子からも」という表現は「子」を復活後のイエスと受け取るとき、はじめて意味のある表現となる。「＜わたしを信ずる者は、その胎から生ける水の河が流れ出る＞。だがイエスはまだ栄光を受けていなかったのて、霊は降っていなかった」（ヨハネ 7,38-39）と述べられる所以である。

次に、ニュッサのグレゴリオス自身の著作のうちに、「子からも」と *ek* を残す読みを支える典拠を探すとすれば、おそらくそれは『雅歌講話』の末尾部に求められるであろう（GNO VI 467）。ここでグレゴリオスは、上に引いた『ヨハネ福音書』20,22の「聖霊を受けよ」を引きつつ、この「聖霊」を栄光と等置して、『雅歌』における花嫁と花婿の一致の像を、キリストにおける終末論的一致に重ねる。グレゴリオスによれば、この栄光すなわち聖霊の伝承が、弟子たちに始まり生まれを同じくする者たちに行われるという（GNO VI 467,13-14）。これは、終末論的キリストの到来を前提としての、天国界の形成を表現していると言えるだろう。

## 12. ふたたびギリシア語文献学へ

『主の祈りについて』のテキストのうちに *ek* を残したいという筆者の主張は、

文献学的には、最古の写本 Vaticanus Gr. 2066 のうちにこれが見出されることが、その起源はおそらく、東西教会の対立云々よりも古くに遡るものであって、シリア語訳写本にも ἐκ 相当語彙が見出されることが、という二つの点に集約される。ではニュッサのグレゴリオス自身の文体に照らしてみた場合、やはり ἐκ は支持されうるのであろうか。

まず『主の祈りについて』の本文は a) “τὸ δὲ ἅγιον πνεῦμα καὶ ἐκ τοῦ πατρὸς λέγεται καὶ [ἐκ] τοῦ υἱοῦ εἶναι προσμαρτυρεῖται.” となっているのに対し、イエーガーは b) “τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον, ὅτι ἐκ τοῦ θεοῦ ἐστι καὶ τοῦ Χριστοῦ ἐστι, καθὼς γέγραπται” を引き、これらを並行箇所と考えて、後者を基に前者の ἐκ を削除する、という決断を下したことを先に見た。しかし、これらは本当に並行箇所と言えるのであろうか。

はじめに、両者は若干相違を見せている。前者では τοῦ υἱοῦ となっているのに対して、後者では τοῦ Χριστοῦ となっている。これに伴い、前者では ἐκ τοῦ πατρὸς となっているのに対し、後者では ἐκ τοῦ θεοῦ となっている。

まず「子」と「キリスト」は同一であろうか。三位一体論で定式的表現として扱う場合、両者は言うまでもなく等置される。また「聖霊」というものがキリストの霊として理解されるということは、当然のこととして理解され得てであろう（上掲のヨハネ 7,38-39 を参照）。旧約聖書には聖霊の存在は仄めかされているにしても、明確な形では記述されていないのであるから。したがって、聖霊がキリストの霊であることは当然であるが、拙見によれば、この際「キリスト」とは十字架上で「血と水」を流す存在を言うのであり、いったん絶命した十字架上のイエス（ヨハネ 19,33）から流される霊こそ、生命としての聖霊だと考えられよう（1 ヨハネ 5,8）。これに対し、父との関係において「子」という表現が用いられるのは、おそらく復活者としてのイエスを囲む共同体において、教会共同体内に存在する復活のイエスを指す場合ではないだろうか。そして「加えて証言される」（προσμαρτυρεῖται）という表現は、「霊が子に属す」という神学的次元にではなく、「復活の後」という時間的な先後関係に言及するものだと言えたい（この点で、後に掲げるベッサリオンの解釈とは若干方向性が異なる）。

イエーガーと筆者の立論の違いは、端的に言って、復活後のイエスが現存する共同体での体験の有無にあるとも言えるかも知れない。ウィルソンが喝破するように（Reynolds & Wilson<sup>3</sup> 1991: 150）、本稿でもたびたび言及してきた「ギリシア・カトリック教会」は、ルネッサンス期の枢機卿ベッサリオン

(1403-72) にその淵源を有すると言える。ハンガリーのギリシア・カトリック教会もその一部を形成し、彼らは直接的には1646年の「ウングヴァール〔現ウクライナ・ウジュホロド〕の教会合同」に自らの起源を得る。ベッサリオンは、生まれた際の洗礼名をバシレイオスと名乗っていた。バシレイオス(330-379)は、ニュッサのグレゴリオスの実兄である。「ベッサリオン」という名は、彼が1423年に聖バジリオ修道会に入会し、修道誓願を立てた際に自らの名とした人物名であり、ビザンティン典礼の聖人暦(メノログイオン)では6月6日および11月29日が記念日となっている。当日の記載を見ると「ベッサリオン、聖生の師父は、4世紀の末、エジプトのスケティスで隠遁生活を送り、奇跡を起こすという評判で名高かった」とある(秋山2009:70)。この15世紀の人ベッサリオンも、ニュッサのグレゴリオス『主の祈りについて』の写本本文の問題に言及している。以下は、ベッサリオン『聖霊の発出について』からの一節である(Candal 1961:65-66)。

### 13. ベッサリオン『聖霊の発出について』

「さらにニュッサのグレゴリオスは<偉大なモーセは、シナイ山上での秘儀をもってイスラエルの民を導こうとしたとき>(注:現・第2講話冒頭)に始まる講話『主の祈りについて』の中で、神の三位について区別を設けている。まず父を子と霊から区別しているが、これは父が原因を有しないのに対し、子と霊とは原因を持つものであるということによる。次いで子と霊とを区別するが、両者ともに原因を有するという点では互いに共通するものの、子は父から発するのに対し、霊は父と子から発するという点で互いに区別を設けている。というのも、比較的古い複数の手写本がこのように記しているからである。かくしてこの師父によるならば、霊は子から発する。しかしながら、もしある人々が一比較的新しい複数の手写本に基づき—<子から>ではなく<子の霊として>と読まれるのだと主張したとして、それでもなお、こう読んだところで、この考え方にさらなる何かが含まれるわけではない。というのも、この読み方からであれ—彼らが望まずとも—、同じ結論が導き出されるだろうからである。なぜなら子と霊に関して、原因を有するということをめぐり両者が互いに共通するというのであれば、どのような方法で互いに区別されるのか、と尋ねられることは明らかだからである。そして両者が互いに、原因を有するという点を共有するにしても、子は<父から名づけられ>、それ以上に子の固有



性が進みゆくことはないのに対し、霊は＜父から語られ、あわせて子に属すと証言される＞と表明される。したがって、霊はキリストの霊でもある。グレゴリオスは「しかるに子は、霊のものでもないし、霊に属すと語られることもない。この関係上の連関性が逆転することはない」と述べている（注：GNO VII/ii 43,5-7）。そして霊は子に属すと語られる一方、子は霊に属すとは語られないという点をもって、師父は区別の上で十分であると考えているのである」（*De spiritus sancti processione*, num.93）。

上掲のように、ウィルソンはギリシア・カトリック教会をベッサリオンに遡源させたが、西洋古典学もまたベッサリオンにその起源を有している。ホメロスのA写本もヴェネチアの聖マルコ図書館に所蔵され、それはベッサリオンの寄贈に負うものである。ベッサリオンは『主の祈りについて』の写本のうち、*ἐκ*を保存する写本に関して、これを「古い写本類」と複数形で引く。その中にはVaticanus Gr. 2066 も含まれていたと思われるが、いずれにせよ、ベッサリオンは聖バジリオ修道会士であった。聖バジリオ修道会とは、バシレイオスの修道規則を奉ずる東方系の修道会が総じて得る名称であり、コンスタンティノポリスと南イタリアとの交流も往時には盛んで、写本のやり取りも行われていたと考えたい（秋山 2010）。筆者が、もしイエーガーを継承しつつさらに何かを加えうるとすれば、古典古代学徒とはこのベッサリオンに負う存在である、ということを一層強く自覚することであろうか。

## 結. ニュッサのグレゴリオスと「古典古代学」

以上が、2017年9月末にいったん提出した「旧稿」のほぼ全容である。現時点でも、『主の祈りについて』のVaticanus Gr. 2066 写本上に記された*ἐκ*を削除すべきでない、とする筆者の考えに変更はない。ただこの2年の間に、ニュッサのグレゴリオスの『主の祈りについて』、特に先の*ἐκ*が含まれる一節をめぐるのは、ベッサリオンが活躍したフェッラーラ・フィレンツェ公会議（1438-39）ばかりでなく、それに先立つこと150年以上、1274年に開催されやはり教会合同について論議された第2リヨン公会議の前後にも、合同推進派のコンスタンティノポリス総大司教ヨハネス11世ベッコス（1225-1297；在位1275-1282）らをはじめとする神学者たちにより、東西間の教義上の論点として盛んに取り上げられていたことを知った。現在では、聖霊が「父より発出する」とする正教会の神学は、キリストが父の下に完全に従

う終末の時点（1 コリント 15,28）におけるヴィジョンとして有効であろう、と筆者は考えている。われわれの生きる「いま」が、キリスト到来から終末までの途上にあるとする立場に立つか、われわれの立場が常にキリスト再来の終末に置かれていると表明し続けるか、その選択は自由であろう。このような省察の過程で、ギリシア悲劇・喜劇作品をめぐり、ビザンティンのパライオロゴス朝期（1261-1453）に量産された「ビザンティン三部作」についての拙考（「新稿」）をまとめることができたのは幸いであった。また、ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』に関してローマ大会で発表した拙論についても、日の目を見る目途が立った。これらにより、かねてよりの念願、すなわち教父神学と古典学とを相互の関連性のうちに論じうる可能性に向けて、筆者が一条の光を見出せたのは大変嬉しいことである。

筆者は、日本にほぼ定着したかに見える「西洋古典学」には、本来的に教父学・典礼学や聖書学を含めるべきである、と考えてきた。その際、筆者の枠組みを支持してくれるであろう存在が、まずもってヴェルナー・イエーガーにほかならない。その一方で、このような包括的な学問分野を意味する名として、筆者はさしあたり「古典古代学」という名称を用いている（筑波大学古典古代学研究室より 2009 年から継続発刊中の機関誌『古典古代学』を参照）。「古典古代学」とは、イエーガーが抱くであろう「古典学」からさらに、ベッサリオンそしてニュッサのグレゴリオスへと遡上した際に立ち現れる学問的枠組みを意図したものである。そのことを踏まえた上で、ニュッサのグレゴリオスのうちに、古典古代文化のキリスト教的止揚の実像を捉え出したヴェルナー・イエーガーの慧眼は、筆者にとって改めて本質的な意味を有するものであった。そしてこのヴェルナー・イエーガーの学問に関して、直接筆者に伝えて下さったのは、ほかならぬ久保正彰教授だったのである。

### 【参考文献】

- 秋山 学 2015 「陣中旗の神学—真理と十字架—」『筑波大学地域研究』第 36 号、69-83 頁。  
 秋山 学 2010 『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』、創文社。  
 秋山 学 2009 「ビザンティン典礼暦から読む帝政ローマ／ビザンツ帝国の歴史—古代学の源泉としての「メノログイオン」(2)—」、『文藝言語研究 言語篇』第 55 巻、25-109 頁、筑波大学。  
 秋山 学 2001 『教父と古典解釈—予型論の射程—』、創文社。  
 秋山 学 1991 『ニュッサのグレゴリオス「雅歌講話」』(大森正樹・宮本久雄・谷隆

- 一郎・篠崎榮と共訳；全15講話のうち第13-15巻を担当），新世社。
- 久保正彰 1982「ギリシア悲劇の恩師たち」『ユリイカ』1982年8月号（特集・ギリシア悲劇）93-99頁。
- 久保正彰 1964「Center for Hellenic Studiesについて」『西洋古典学研究』第12号，110-113頁。
- 久保正彰 1956「五人のΦΙΛΟΛΟΓΟΙ」『西洋古典学研究』第4号，100-106頁。
- 筑波大学古典古代学研究室 2009 —『古典古代学』（既刊12冊）。
- 野町 啓 1964『初期キリスト教とパイデア』(W. イェーガー著)，筑摩書房。
- Akiyama, M. 2019b “Significance of the High-Priestly Prayer of Jesus (Jn 17) in comparison with the Structure of the First Half of Homer’s *Odyssey* (Od. 1-12)”, Benyik G. (ed.), *The Hellenistic and Judaic Background to the New Testament: 29th International Biblical Conference Szeged 27-29 August 2018*, JATE Press, Szeged, 33-42.
- Akiyama, M. 2019a “Lo "gnostico" e Chrésis secondo Clemente Alessandrino”, Mülke M. (hrsg.), *Chrésima: Exemplarische Studien zur frühchristlichen Chrésis*, Walter de Gruyter GmbH & Co.KG, Berlin, 45-56.
- Akiyama, M. 2018 “The "Spiritual Worship" (Rm 12,1) in Contrast with the "Dedication" (Jm 2,21)”, Benyik G. (ed.), *Interpretation of the Letter to the Romans: 28th International Biblical Conference Szeged 28-30 August 2017*, JATE Press, Szeged, 39-49.
- Akiyama, M. 2017c “L’Unigenito Dio come "esegeta" (Gv. 1,18) secondo Clemente Alessandrino”, Vinzent M. & Ashwin-Siejkowski P. (eds.), *Studia Patristica* vol. LXXIX, vol.5 Clement of Alexandria, Peeters, Leuven/Louvain, 153-160.
- Akiyama, M. 2017b “Il significato della «giustizia resa ai santi dell’ Altissimo» (Dn 7,22) nell’ interpretazione di Giovanni e di Padri greci”, Mazzanti A. M. & Vigorelli I (a cura di), *Krisis e cambiamento in età tardoantica: Riflessi contemporanei*, EDUSC (Edizioni dell’Università di Santa Croce), Roma, 149-165.
- Akiyama, M. 2017a “A „quartodecimánusok” álláspontja: Hogyan értékelhetjük ezt ma?”, Benyik G. (ed.), *Vallási és kulturális konfliktusok a Bibliában és az ősegyházban: 27. Nemzetközi Biblikus Konferencia, 2016. augusztus 29-31.*, JATE Press, Szeged, 25-33.
- Akiyama, M. 2016b “Il significato misterioso della profezia nelle Omelie su Ezechiele di Gregorio Magno”, Jacobsen A.-C. (ed.), *Origeniana Undecima: Origen and Origenism in the History of Western Thought*, Peeters, Leuven/Louvain, 563-574.
- Akiyama, M. 2016a “Felülkerekedés a gyűlöleten János evangéliumában”, Benyik G. (ed.), *Gyűlölet és kiengesztelődés a Bibliában: 26. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2015. augusztus 27-29.*, JATE Press, Szeged, 17-26.
- Akiyama, M. 2014c “L' "eredità" nella Gerusalemme celeste (Ap 21,7)”, Benyik G. (ed.), *The Bible and Economics: International Biblical Conference XXV. 22nd -24th August 2013*, JATE Press, Szeged, 37-46.
- Akiyama, M. 2014b „Nagy Szent Bazil liturgiája és a "mindenség megújulása"”, Tóth J. D. & Heidl G. (eds.), *Studia Patrum V: Irodalom, Teológia, Művészet*, Szent István Társulat, Budapest, 109-120.

- Akiyama, M. 2014a „Nagy Szent Bazil a keresztség szentségéről”, Tóth J. D. & Heidl G. (eds.), *Studia Patrum V: Irodalom, Teológia, Művészet*, Szent István Társulat, Budapest, 121-130.
- Akiyama, M. 2013 „Istennek a világ iránti szeretete János Evangéliumában: a bizánci teológia tükrében”, Benyik G. (ed.), „Jézustól Krisztusig”: 24. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2012. augusztus 21-23., JATE Press, Szeged, 29-40.
- Akiyama, M. 2012b „A tüposz Mopszvestiai Theodórosznál”, Heidl G. (ed), *Studia Patrum IV: Szentírás-Ertelmezés és Teremtésfelfogás az ókeresztény korban*, Szent István Társulat, Budapest, 89-96.
- Akiyama, M. 2012a „A Bölcsesség működése a Sirák fiának könyvében”, Benyik G. (ed.), *Isteni bölcsesség emberi tapasztalat: 23. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2011. szeptember 8-10.*, JATE Press, Szeged, 51-58.
- Akiyama, M. 2011b „La “figura” tipologica vera nelle Omelie di Origene su Ezechiele”, Kaczmarek S. & Pietras H. & Dziadowiec A. (eds.), *Origeniana Decima: Origen as Writer*, Peeters, Leuven/Louvain, 539-544.
- Akiyama, M. 2011a „A „közösségért saját életet adó Jézus lelke” János Evangéliumában: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia tükrében”, Benyik G. (ed.), *Testben élünk: 22. Nemzetközi Biblikus Konferencia 2010. szeptember 9-11.*, JATE Press, Szeged, 161-169.
- Akiyama, M. 2010 „Szent Pál és az „egyetemes történelem” nézőpontja”, Benyik G. (ed.), *Szent Pál és a pogány irodalom: 21. Nemzetközi Biblikus Konferencia, 2009. szeptember 24-26.*, JATE Press, Szeged, 25-34.
- Akiyama, M. 2006 „Görög patológia jelentősége és lehetősége Japánban — Önéletrajzi emlékirat—”, *Athanasiana* 22, 91-107, Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, Nyíregyháza.
- Calder III, W.M. (ed.) 1992 *Werner Jaeger Reconsidered*, Scholars Press, Atlanta, Georgia.
- Callahan, J. F. (ed.) 1992 *Gregorii Nysseni Opera VII/ii*, Brill, Leiden.
- Candal, E. (ed.) 1961 *Bessarion Nicaenus: De spiritus sancti processione: ad Alexium Lascarin philanthropinum*, Pontificum Institutum Orientalium Studiorum, Roma.
- Jaeger, W. 1966 *Gregor von Nyssa's Lehre vom Heiligen Geist*, Brill, Leiden.
- Jaeger, W. 1961 *Early Christianity and Greek Paideia*, Cambridge, Massachusetts.
- Jaeger, W. 1960 *Scripta Minora II*, 1960, Edizioni di Storia e Letteratura, Roma.
- Jaeger, W. 1936-1947 *Paideia*, 3 Bde., Walter de Gruyter, Berlin.
- Reynolds, L.D./ Wilson, N.G. <sup>3</sup>1991 *Scribes & Scholars*, OUP, Oxford.
- Valvo, A. (a cura di) 2013 *Werner Jaeger: Cristianesimo primitivo e paideia greca, con saggi integrativi di autori vari*, Bompiani, Milano.